

ART KISS LETTER

TITLE

プラカードのために
For a Placard

DATE

2026

9.19^土 / 11.29^日

開館時間 10:00-20:00 (展覧会入場は19:30まで)

休館日 火曜日

ただし9/22 (火・祝)、11/3 (火・祝)は開館し
9/24 (木)、11/4 (水)は休館

プラカードのために
For a Placard

田部光子
Tabe Mitsuko

牛島智子
Ushijima Tomoko

志賀理江子
Shiga Lieko

金川晋吾
Kanagawa Shingo

谷澤紗和子
Tanizawa Sawako

飯山由貴
Iiyama Yuki

笹岡由梨子
Sasaoka Yuriko

2026 9.19^土 / 11.29^日

CAMK 熊本市現代美術館
CONTEMPORARY ART MUSEUM KUMAMOTO

「プラカードのために」のそのさきに

正路佐知子（国立国際美術館 主任研究員）

一流労組のカンパニヤの為のプラカードは何故こうも右翼のそれと似かよっているのだろう。やはり二十代前後の莫大なエネルギーを擁しているはずなのに、こう云ふものはとても古くさい。現在すべての組織が次々に封じ込められて行く原因はこんなところにもある。おくればせながらも、大衆のエネルギーを受け止められるだけのプラカードを作って見ようか、高らかな笑いのもとに星条旗を破る為のカンパニヤが組織できないだろうか？ それもたった一枚のプラカードの誕生によって——だったらすばらしい。そして人工胎盤ができたら、始めて女性は、本質的に解放されるんだけれど。

——田部光子「プラカードの為に」1961年（すべて原文ママ）

「プラカードのために」というタイトルは、福岡を拠点に活躍した美術家・田部光子が1961年に発表した短い文章のタイトル「プラカードの為に」から借りたものである。¹

国内を拠点に活動する現代美術作家によるグループ展を企画するにあたり、私はまず、あらためて美術の力、表現の力を信じたい、その力について考える機会にしたいと考えていた。表現するということは、自らの思考や経験をかたちにし、外部へと示し、誰かに差し出すこともある。私自身に引き寄せて言えば、展覧会をつくることも公に向けて何かを提示する行為であり、責任を伴う表現のひとつのかたちである。表現すること、何かを公に示すことができるということ自体の特権性も、念頭に置いておかねばならない。では何を示すのか。「根深い支配構造、権力構造のなかで生きてゆかざるを得ない身体や声はどのように不可視化され、沈黙を強いられてきたのか。その身体や声をどのように想像し、「私」と接続することができるのか。そしてその身体や声はどうすれば語ることができるのか。連帯は可能なのか。そもそも私は、私たちは、どこに立っているのか。「私たち」とは誰か。」² 制度や権力による選別や排除、「私たち」の日常とも不可分なさまざまな差別と抑圧、生きづらさを生む社会。いまだに繰り返される人権侵害と脅かされる尊厳。こうした現実について、表現を続けてきた作家たちの作品とともに考える場をつくることができるのではないか。田部光子、牛島智子、志賀理江子、金川晋吾、谷澤紗和子、飯山由貴、笹岡由梨子。それぞれ表現をとおして、生きることと尊厳について思考を重ね、実践を続けてきた作家たちである。³



冒頭に引いた文章「プラカードの為に」は、1961年銀座画廊で開催された「九州派展」開幕数日前に発行された機関誌に掲載された。出品作品である《プラカード》《人工胎盤》の発想の経緯が記されているのはそのためである。「大衆のエネルギーを受け止められるようなプラカード」がつくれたら、既存の組織や権威を「高らかな笑い」のもとに突き破るような新たな運動（カンパニヤ）を起こすことができるのではないか。ここにはそんな発想、提案が読み取れる。旧来の慣習や思考から脱け出し、それまでとは異なるものを想像・創造することができたら、それは社会を変える一歩となるだろう。「たった一枚のプラカード」は文字通り、新しい発想によるプラカードや旗であってもよい。そして田部にとっての「たった一枚のプラカード」は、《プラカード》や《人工胎盤》をはじめとする作品そのものでもあっただろう。田部は生涯にわたり美術家としてこの社会に対して、そして未来に向けて何を示しうるのかを問い、実践を続けた。そう、「たった一枚のプラカード」は思考の数だけ存在するのだ。

「プラカードのために」で展示される、牛島智子、志賀理江子、金川晋吾、谷澤紗和子、飯山由貴、笹岡由梨子の作品もまた、それぞれが経験や身体をとおして考え、つくり出した「たった一枚のプラカード」と呼ぶことができる。それらが集まる空間を、私は「生きられる場」と呼びうるものとして構想した。実際の空間がそう呼べるものとなっていたかどうかは、訪れた人がそれぞれの身体と経験をとおして感じるとものだから、私には確かめることはできない。ただ少なくとも、私自身にとって、あの空間は確かに「生きられる場」だった。「いくつもの声が聞こえてくる。それは抑圧された者たちの語りであり、呼びかけであり、解放の歌である。いくつもの言葉が目飛び込む。詩、声明、告発、意見、手紙、他者によって聞き取られ書き記された声がある。「オルタナティブなヴィジョン」を示すイメージが各所にある。言葉にできない思いを表すふるまいがある。メタファーがある。シンボルがある。そして、私たちの生活が交差する。抵抗や怒りだけではない。喜びや愛がここにはある。」⁴ 私は昨年12月に執筆した図録用の文章において、国立国際美術館で開催中だった「プラカードのために」の会場の様子をこのように記している。図録エッセイでは紙幅に限りがあったため端的に記すにとどめたが、もう少しあの空間を振り返ってみたい。

板に文字を記せば、それはもうプラカードたりうるように、「プラカードのために」と題する展覧会に相応しく、会場は声と言葉に満ちていた。

作家ごとに空間を明確に仕切ることをせず、また一人の作家の作品を分散させて展示することで、異なる作家の作品が発する言葉が、実際に呼応しているかのように感じられる瞬間が幾度もあった。たとえば、飯山由貴の映像作品《In-Mates》に登場する詩人・ラッパーのFUNIが画面の向こうにいる私たちの呼びかける声、詩。志賀理江子の映像作品《風の吹くとき》で女性が語る「東北」と呼ばれた地で生きる人々の言葉。笹岡由梨子《イカロスの花嫁》で花嫁人形ヨリコが歌ううた。あるいは作品中に刻まれた文字の数々。

会場を満たしていたのは声や言葉だけではない。同じくらい多くのイメージ、色と形があり、そして、手の痕跡があった。たとえば、田部光子《プラカード》で襖の支持体の上に手でちぎり貼られたコラージュ。牛島智子《ひとりデモタイ 箒＊筆＊ろうそく》の支持体に用いられる八女和紙とそれによる造形。谷澤紗和子が高村智恵子による紙絵（切り絵）を手本に取り組んだ《はいけい ちえこ さま》シリーズ。「これはなんでも思っていることを書いていいカードです」と題する飯山由貴のワークショップで参加者が思い思いに書き、描きつくったカード。笹岡由梨子《Working Animals》シリーズの古いぬいぐるみに縫い付けられた色とりどりの布片やビーズ。あるいは金川晋吾の《明るくていい部屋》に現れる日常の営為の一つひとつ。

切る。貼る。描く。身の回りにあるものから始めてみる。声に出してみる。身体を動かし、誰かとかかわり、言葉を交わす。自分の身体をとおして行為し、思考を重ねてきたその営みの複雑で豊かなありようが、空間に充滿していた。もちろん、表現することと、大きな仕組みや社会そのものを変えることとのあいだには距離があり、時間もかかる。それでも自らの思考や行為を誰かの前に差し出すこと。自分の手を動かし、身体をとおして世界に働きかけること。あるいは自分自身を肯定し、そして自分を含む一人ひとりの尊厳について考えること。自分がここにいていい存在だと思えること。自分の感じたことや考えたことをかたちにし、誰かに差し出してみようと思うこと。こうした一つひとつもまた、社会に対する抵抗の方法と言えるのではないだろうか。

あの場所にあったのは7名の作家の声や手の痕跡、思考だけではなく。制作に協働した人たち。過去に表現を残した表現者たち。不可視化され、沈黙を強いられてきた存在。出品作家として掲げられている名前は7名だが、その先にさらに多くの人の手や声が、行為が、記憶が連なっていた。一人の思考や意志が外部に示され、また別の一人の思考や意志と出あうことで、新たな関係が生まれる。田部が「たった一枚のプラカード」に託していたのも、「大衆のエネルギー」から新たな運動が生まれる可能性だった。本展覧会の出品作品は、差別や抑圧、制度による排除や搾取など、私たちが生きるこの社会の構造や現実と向き合うことから生み出された。作品は、その問題の実情をあらわしているだけではない。そこには抵抗の



方法が示され、新たな世界の見方や生き方への提案がある。抵抗と喜びは必ずしも対立するものではない。表現することの喜びが、すでにある世界とは異なるものを生み出す力にもなるからだ。

展覧会というものは、普段は別々の場所にあるものが限られた期間にだけ集まり、その場所で偶然の出会いを待ち、会期を終えると跡形もなく消える。出品された一つの作品だけを目当てに足を運ぶ人もいるかもしれないが、その作品だって、どのような作品と並び、どんな空間に置かれるかによって見え方を一変させる。作品とはまた別の機会に再会できる可能性があっても、作品同士、作品と空間、作品と来場者との関係は、その場限りのものだ。展覧会をつくるとき、私はいつも、その奇跡を噛み締める。だから、展覧会が終了し、その空間が跡形もなく消えてしまったあとに、同じ名前の展覧会が再び実現することには、不思議な感慨がある。巡回展は、別の地で同じ作品を見てもらうための形式だが、展覧会がその場所に集まった作品と空間、そしてそこを訪れる人々とのあいだに生まれる一回限りの関係から成り立つものだとすれば、それは単純な移動や再現ではない。

「プラカードのために」は、国立国際美術館での空間そのままの形で熊本へと巡回するわけではない。会場の特性や事情にあわせ、作品点数や作品の配置が変わる。そして作品が置かれる土地が変わり、その前に立つ人も変わる。熊本ではまた、新たな空間が立ち上がることだろう。本展覧会には、九州の地と深くかわる作家や作品が含まれているし、また震災とその後について語る作品もある。それらが熊本という場所に置かれたとき、これまでとは異なる距離や関係のなかで出てくるものがあるかもしれない。一度きりだったはずの展覧会が、別の場所で、新たな関係を結びながら再び起動する。そのこと自体が、私にはさならぬ奇跡のように思える。九州、熊本という場所で、「プラカードのために」はどのように見えるだろうか。どんな新たな出あい待っているだろうか。

- 1 田部光子「プラカードの為に」『九州派5』、1961年9月10日発行。
- 2 正路佐知子「「プラカードのために」のために」『プラカードのために』、国立国際美術館、2026年1月、p.10
- 3 各作家の作品については、会場に掲示する解説や展覧会図録所収の出品作品についてのエッセイを参照。
- 4 同上、p.13

画像クレジット：「プラカードのために」会場風景、国立国際美術館、2025年 撮影：山中慎太郎（Qsyum!）

CAMK
ニュース

「プラカードのために」 展覧会関連イベント

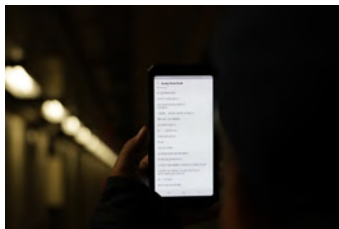
いずれのイベントも
無料でご参加いただけます

アーティストトーク

日時 : 2026年9月19日(土) 13:30-15:30
会場 : ホームギャラリー
定員 : 90名(当日先着順)

開催記念講演会

日時 : 2026年9月20日(日) 14:00-15:30
会場 : ホームギャラリー
定員 : 90名(当日先着順)
登壇 : 正路佐知子(国立国際美術館 主任研究員)



飯山由貴《In-Mates》2021年
写真: 金川晋吾

飯山由貴《In-Mates》上映会 & アフタートーク

日時(全3回):

- ①2026年9月20日(日) 11:00-12:00
登壇: 飯山由貴
- ②2026年10月25日(日) 14:00-15:00
登壇(オンライン): 飯山由貴、FUNI(詩人・ラッパー)
- ③2026年11月21日(土) 16:00-17:00
登壇(オンライン): 飯山由貴、外村大(歴史学者)

会場 : ホームギャラリー
定員 : 70名(当日先着順)

※作品の意図をご理解いただくために、上映中の途中入退場はご遠慮ください。



写真提供:
京都精華大学ギャラリー Terra-S

谷澤紗和子ワークショップ
「ことばのきりがみ」

日時 : 2026年10月17日(土) 14:00-16:00
会場 : キッズファクトリー
定員 : 15名(事前予約制、先着順)
対象 : 中学生以上
講師 : 谷澤紗和子

※参加をご希望の方はHP掲載のフォームからお申込みください



「牛島智子の身の回りにあるものでできた、
和ろうそくと木の燭台づくり」
(2026年2月1日、国立国際美術館)の様子、
撮影: 白井茜

牛島智子ワークショップ
「身の回りにあるものでできた、和ろうそくと木の燭台づくり」

日時 : 2026年11月14日(土) 13:30-16:00
会場 : キッズファクトリー
定員 : 15名(事前予約制、先着順)
対象 : 中学生以上
講師 : 牛島智子

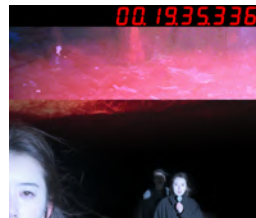
※参加をご希望の方はHP掲載のフォームからお申込みください



金川晋吾《折り／長崎、セルフポートレート》
2022年、国立国際美術館蔵
©Shingo Kanagawa

対談 金川晋吾×五野井郁夫

日時 : 2026年11月15日(日) 14:00-15:30
会場 : ホームギャラリー
定員 : 90名(当日先着順)



志賀理江子《風の吹くとき》2022-2025年、
国立国際美術館蔵 ©liekoshiga

鼎談 志賀理江子×古里裕美×齋藤寛子

日時 : 2026年11月28日(土) 14:00-15:30
会場 : ホームギャラリー
定員 : 90名(当日先着順)

熊本市現代美術館

Contemporary Art Museum, Kumamoto

ART KISS LETTER Vol. 123 (2026年9月)
編集: 稲垣向日葵、富澤治子、穴瀬聖
展覧会ビジュアルデザイン: 尾中俊介 (Calamari Inc.)
発行: 熊本市現代美術館 www.camk.jp
〒860-0845 熊本市中央区上通町2-3 Tel 096-278-7500

